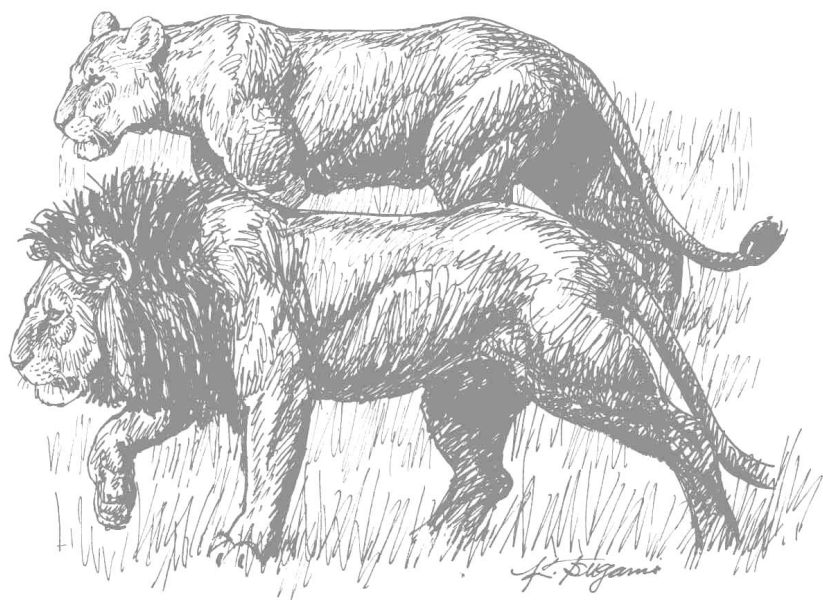


人喰鉄道

戸川幸夫

人喰鉄道

戸川幸夫



毎日新聞社

人喰鉄道

定価六〇〇円

昭和四十三年十月二十五日 第一刷
昭和四十七年五月 十日 第二刷

著者 戸川幸夫

編集人 浜田琉司

発行人 朝居正彦

発行所 毎日新聞社

東京都千代田区一ツ橋／大阪市北区堂島上／北
九州市小倉区紺屋町／名古屋市中区堀内町

印刷 共同印刷
製本 大口製本

△検印省略▽

人喰鉄道

目次

鉄の蛇	セ	Shetani(悪霊)	一四
ハルスレンの最後の狩	二	炎の眼	二六
つぎの餌場	三	二枚の爪	四三
もう一つの敵	四	一人の密猟者	五

炎の踊り	三	ムガイの神の怒り	七
ねむたい眼	七	黄色い道	八
天の星と地の星の間で	九	奸策	九
三本指の襲撃	一五	過信への戒め	一三
パターソンの新たな出発	二九	鰐の河	二六
二人の婦人伝道師	三三	羽の嵐	四〇
泥の怒り	四七	犀の子	五四

ヘラシニングの死

一六

サボタージュ

一六

脅迫

一五

黒い沸騰

一五

鎮圧

一五

一匹の甲虫

一五

野性の力

二五

ブータの妻と弟

二〇

荒野の殺し屋

二七

槍と爪

二四

軍隊出動

二三

囧

二八

愛のはげまし

二五

混乱の中で

二五

真昼の流星	二五	巨大なる壁	二六
最初のライオン	二五	怖るべき復讐	二六
死の対決	二六	最初の勝ちなのり	二五
落日のサバンナで	二五	大いなる犠牲	二九
最後の襲撃	二六	輝く太陽の下を	三三
あとがき	三二		

装丁 津神久三
見返しと絵 石田武雄

人喰鉄道

「サンデー毎日」昭和四十二年十二月三日
号から四十三年十月六日号まで連載

鉄の蛇

モンバサは、正確にいうなれば、インド洋とアフリカ大陸の接点にある小島で、狭い水路によって東アフリカ本土から分離している。

島と同じ名のモンバサの町は、一四九八年に例のバスコ・ダ・ガマが船を乗り入れた港として知られ、その後、二百年にわたるポルトガル人とアラブ人との抗争の地でもあったのでキシウムビタ（戦いを好む所）という古い地名がつけられていた。

昔からウガンダへの入口として、また内陸部への交易港として重要な役目を果たしてきたが、しかし本当に良い港は島の反対側、モンバサ市から三哩（四・八キロ）のところ^{マイル}に在って、キリンディニと呼ばれている。それは八水の深い所^所という意味で、町はマンゴーやバオバブや、バナナやシユロの濃い緑の森に覆^{おほ}われていた。

英国が東アフリカを保護領として宣言をした翌年の一八九六年の夏、このキリンディニの港から一匹の鉄の蛇が這^は

いだした。鉄の蛇はのろのろではあったが、着実な足でリでケニヤの首都ナイロビに向かって北上していった。

夏が去って冬がきた。そしてまたも夏が訪れて冬となった。

一八九八年の早春までに、鉄の蛇は体を伸ばしてモンバサ島と本土の間に横たわるマキユバ海峡を渡り、ラバイの丘に登り、細くて赤い砂土に覆われたおそろしく単調なタール砂漠^{さばく}を横切って八荒地の子供たち^ちという名のワ・ニカ族のマウングの森を通り、ボイからワ・タイカ族の支配するタイタ高原を左に、ムタンダの岩山を右に見て、海岸から百三十二哩のサボ川のほとりに到達していた。

それは暗黒大陸といわれるアフリカに文明の曙光^{とくわう}を投げかけんとするウガンダ鉄道の建設だった。

鉄道は第一期工事の計画としてモンバサ港とナイロビを結びつけることになっていた。サボの駅はもちろんまだ出来上がってはいなかったが、駅の予定地にはレールや枕木^{まくらぎ}やコンクリートの桁材^{けうざい}が積み重ねられ、さらにそれらの建設材料をつんだトロツコやそれを曳^ひつぱる小さな機関車がとまっていた。測量器具やウインチやロープやシャベルやツルハシなども雑然と散らばっている。一メートルほど高く盛られた土の帯が続いていた。路盤であった。路盤はボ

イの方からやってきて、さらに三百メートルほど先まで伸びていたが、路盤の上で枕木を固定させるためにまく道床バラストは、駅の予定地の少し先までしか置かれてなく、従ってレールはここで切れていた。つまり一年半かかって這いつづけた鉄の蛇の頭部がここなのであった。

その頭部を中心としてたくさんさんのキャンプがばらばらに建てられていた。中央の青い大きなテントは建設工事事務所にあてられていた。その隣りが所長のハルスレンのテントで、彼のテントにはモンパサから遊びに来ていた末の妹のミッシェルが泊りこんでいた。

ハルスレンは三十を一つか、二つ越していたがまだ独身だった。英国陸軍の将校として大尉まで昇進したが、ある年の演習で馬もろとも崖から転落し、ひどいびっこになってしまった。そのために陸軍を退いてウガンダ鉄道の建設委員となってここに赴任してきていた。しかし、彼の軍人としての勇猛心は少しも喪われてはいなかった。工事責任者としてもうってつけで、彼はここで働いている千人のインド人労働者や三千人近いアフリカ原住民労働者を威服し、かつ彼らの信頼を勝ち得ていた。彼の事務所にはヒューブナー、ファウル、ホワイトヘッドという三人の白人技師が居り、技師長は年配のブルックだった。技師の下には

インドから連れてこられた数名のインド人の監督員が配置されていた。彼らは本国で鉄道工事に関係したことのある経験者で、スプーナー、パレンチ、カリムバックスその他だった。このほかにハルスレンが信頼できる者として特に眼をかけていた者が二人いた。二人ともアフリカ人で、一人はワ・タイカ族に属するウンガンシークという土工頭であり、もう一人はム・カンバ族のヘラシンギという石工頭だった。ヘラシンギは毒矢づくりが上手であつた。それは彼が属するム・カンバ族の伝承によるもので、家の周囲に植えるナナという野草の実からつくり出す毒を手製の矢に塗るのだ。

ウンガンシークには、そんな器用な技はなかったが山岳種族だけに頑丈で、力が強く、勇敢だった。一メートル九十センチという巨大な肉体の持主だけに誰と格闘しても負けたことがなく、三千人のいろいろな種族の混りあつたアフリカ人土工部隊を押えるにはもってこいだった。

二ヵ月あとに大雨季が迫っていた。雨が来る前にサボ川の架橋だけは終えておかなければ、その後の工事に支障をきたすので工事は急がれていた。しかし、どんなに急いでも、野獸の多いこの地域では夜の作業はむりであつた。人夫たちは、太陽がキリマンジャロ山の肩に傾きはじめ

るともうさっさと作業を中止して晩めしの支度にとりかか
るのだった。

樹木の影が長く伸びて、暑かった一日が終わろうとして
いた。と——そこへ五十頭ほどのロバ隊が到着した。乾い
た土埃がロバの群を包んでいた。

ロバを率いているのはインド人の隊商で、彼らはもうこ
この連中とすっかり顔なじみになっていた。インド人や、
アフリカ人や、アラブ人たちが必要とする、または欲しが
るような物をロバの背につけてはるばるモンバサからやっ
てきたのだ。モンバサからは、主な食糧や生活物資は汽車
で送られていたが、四千人からの労働者の要求を満たすこ
とはとうてい出来ない相談だったから、こうした隊商の時
折の訪れは有難かった。

隊長のダルカンスはハルスレンやブルックたちに挨拶し
たあとで、事務所のテントの傍で店開きをした。

「ここにくる途中で、みごとに鬣をもった大きな牡ライオ
ンを見つけてな。一発射ったが逃がしてしまった。日ぐれ
どきでなければ追っかけていって、立派な敷皮をつくった
んだが惜しいことをしたよ。」

あれだけの奴あ、ライオンの多いこのサボでもめつたに
見られない逸品さね」

ダルカンスは集まってきた連中に自慢げに言った。

「で、そいつに中つたのかい？」

石工頭のヘラシンギがたずねた。

「中つたとも、鬣の毛がぱつと散つたから首すじか肩に命
中してるさ」

「掠つたのかもしれないぜ」

「いや、その場所まで行ってみた。するとひどい血が流れ
ていた。だから重傷を負わせたことは間違いない」

「そんなら……」

とヘラシンギは続けた。

「明日朝、追跡して仕とめてくるだな。でないと手負いラ
イオンは仲間に言いつけて、仇をするようになるから……」
ヘラシンギの心配を、そこに集まった労働者たちはにや
にやしながら聞いていたが、

「またヘラシンギの取り越し苦労が始まった。ここには四
千人からの人間が集まってるんだぜ。いくらライオンでも
近よれねえさ」

工事監督のカリムバックスがこともなげに言ったので、
どっと笑いだよめいた。たしかにサボはライオンが多い。
しかしながらライオンが人間を襲ったことはまだ一度もな
かった。

人間はライオンを殺そうとしなかったし、ライオンの方も人間を殺そうとしなかった。人間はライオンが縞馬やウシカモシカ（ワイルドビースト）を襲って殺し、争って喰っている光景を嫌になるほど見てきたし、ライオンも多勢の二本足の連中が群がり集まって何かをやらかしているのをブツシュの中からじっと眺めていた。だが人間もライオンも自分たちの邪魔にならない限り相手を犯すべきものでないを知っていたので、両者の間には奇妙な友情のようなものがあつた。

その友情の均衡をダルカンスが破つたのだ。ヘラシンギは、これまで保たれてきた人間とライオンとの間の平和が、彼の軽率さで破られるのを恐れた。そこでもう一度くり返した。

「怪我をしたライオンは、その口惜しさを仲間に訴えるだよ。そして仲間が仇を討ちにくる。」

だから、お前が傷つけたライオンが、仲間に告げ口する前に殺すだな。こつそりと……こつそりとな……」

ヘラシンギは、本心からそう信じこんでいた。彼と血を同じくするム・カンバ族の労働者たちは、彼の言を信用して不安げにうなずいたが、そこに集まった多くの労働者——その大部分がインドから送られてきたインド人クリー

だったので一笑に付した。彼らはジャングルに棲む虎の恐ろしさは十分に知っていたが、ライオンは虎よりもずっと意気地なしだと思っていた。

ヘラシンギの不安は的中した。ダルカンスは商売に夢中になって、翌朝はやく傷ついた鬣のライオンを追っかけなかつたので、肩のところを射貫かれて、三日間を近くの藪の中で身うごきもせずに呻いていた負傷者は四日目になって、ふらふらになりながら遠くへ移動していった。

ダルカンスが再びそこを訪れたのは中一日を置いた次の日だった。

「ここで苦しんでいやがったんだ」

ダルカンスは藪の中に滲みこんでいる夥しい血の痕を見つけて仲間に告げたが、釣り落した魚が大きかった、というだけで、それっきり彼はそのライオンのことを忘れてしまった。

傷つけられたライオンは、そのあとさらに一週間を呻き続けた。野性の強靱さがなかったら、とうに彼の生命の灯は吹き消されていたに違いない。

彼の灯はいく度か吹きこんでくる風にゆらぎ、消えそうになったが懸命に生にしがみついた。傷の痛みがうすら

ぎ、彼が病の床からひよろひよると起き出てきた時は、彼はすっかり痩せ衰えていた。

彼はひどく餓えていた。そして渴いてもいた。彼は川に降りて、泥水をピチャピチャと音をたてて腹いっぱい飲んだ。

次にすることは肉を得ることだった。だが彼の体力はまったく消耗しており、その上にひどいびっこをひいていた。

彼は、眼の前に現われた多くのカモシカたち——インパラや、ブッシュバックや、ウオーターバックや、ゲレナックを捕えようとしたが、体が思うように動かなかった。ちよろちよろと藪から飛び出してくるネズミ鹿ですら捕えることができなかった。

彼はうろつきまわった。生にしがみついたための必死の努力だった。野性の世界では傷つくということが多くの場合、死に直結している。黒い死の翳が彼の周囲をとびまわっていた。

彼はその目の夕方、やっとの思いで、数日前に仲間が殺した腐敗したキリンの屍を見つけた。ハイエナやジャッカルがさんざん荒し、ハゲコウやハゲワシがつつきまわして、ほとんどもう食べるところの残っていない残飯を、彼

はひもじさの余り、がつがつとかじった。彼が顎を動かすたびに青蝇がもの凄（こわ）い羽音をたてて彼のまわりを飛びまわり、鼻をもぎとるような死臭の中から、白くてまるまる太った蛆がばらばらとこぼれ落ちた。ハイエナやジャッカルでさえ見向きもしない骨にしゃぶりつかねばならない彼には百獣の王としての面目なんかひとかけらもなかった。

その翌日の午後、彼は干からびて水の少なくなった川のほとりで洗濯にきた黒人の女に逢った。それは鉄道工事人の女房だった。彼女はライオンが多いことは知っていたが、昼間のライオンは猫のようにおとなしくて人間を襲うものではないと思ひこんでいたので、たった一人で川へきたのだった。

傷ついた牡ライオンは、二本足の動物が獲物でないことを百も承知していたが、餓えと傷とに悩まされた彼には、背に腹はかえられなかった。平和協定は人間の側から破棄したのだ。飢餓のために一そう敏感になっている鼻孔に人間から発する新鮮な肉の匂いが伝わってきた。彼は、生まれて初めての犯罪を犯した。

工事人の女房の姿が突然に消えたことは、基地でちょっとした話題になったが、おおかた男でもつくって逃げたの

だろうということ、誰も彼女を傷ついたライオンと結びつけた者はなかった。

いや、誰も……と言ってしまったのは語弊がある。石工頭のヘラシシギだけは、ライオンの復讐が始まったのだ、と仲よしのウングアンシークに告げたのだがウングアンシークは、「ライオンが復讐するだ……？」

とばかりにしたように鼻を鳴らしただけであつた。

三日して、こんどは炊事に行った若い土工の姿が消えた。彼は独身者で、しかもさらわれた女房の近くのキャンプに泊まっていたので、彼が工事人の女房としめし合わせて駆け落ちしたのだ、と見られた。

労働者の脱走はこれまでも始終あつて、突然に居なくなつたという報告は度重つていたから、この二人だけが特に問題にされなかつたというわけではない。

そのあとちようど一週間目に、こんどはギリシヤ人の旅商人が襲われた。この不幸なギリシヤ人はたった一人でロバに乗つてサバンナ地帯をやつてきて、人気のないところで襲われたので、彼も殺られたのだということはずつと後になるまでわからなかつた。

傷ついた牡ライオンは、最初のうちこそ恐る恐る犯行を重ねていたが、四人目からは次第に大胆になつてきた。彼

は強い敵だと思つていた人間が案外にもろく、無抵抗で、縞馬やウシカモシカほどの反撃もしてこないのにびつくりすると同時に、軽蔑した。それに人間の肉はカモシカにも劣らず美味であつた。

彼は新しい獲物の肉を二頭の妻に分けてやつた。妻たちも、あの二本足の動物が、これほどいけるもののだとは思つていなかったもので、見なおす氣持になつた。

のろまで、無防備で、無用心で、無力な、しかも決して不味くない獲物がこんなにもごつそりと群がつている以上、なにも苦勞して逃げ足のはやいキリンや、縞馬や、カモシカを追つかける必要はなかつた。事実、槍のように鋭くて長い角をもつたオリックスに脇腹をつき刺されて死んだ若いライオンがいたし、とびかかろうとする一瞬前に縞馬に蹴上げられて頸を砕いて死んだ年寄りライオンもいた。対草食獣の場合、勝利が常にライオンの側にあるとは限らなかつた。

二頭の牝は、思いきつて、傷ついた牡について、彼のやり方を見ならうことにした。ライオンの社会では牝が獲物をとりに働きに出て、牡が子どもたちと留守をまもるのが普通である。だが、どこにも例外はある。この場合がそうであつた。

傷ついたが故にひとりぼっちになり、生きてゆくために獲らえようと努力し、とり易い人間を襲うようになった。『人喰い』はまったく新しい知識と方法をライオン社会にもたらした一種の先覚者であった。その体得した生活の智慧を、仲間——ことに牝たち——に指導したとしても、それは決してルール破りというのではない。

二頭の牝ライオンにとっては、人間の肉は初めてではなかったが、人間を襲って殺すということは初めてであった。それだけに緊張して牝ライオンについていった。

牝ライオンはキャンプ地の周辺まで近よると、そのブッシュに潜りこんでじいっと闇の中を見すかした。

キャンプのところに赤々と火が焚かれ、宵の口らしく人間たちのざわめきが伝わってきていた。

二頭の牝ライオンたちも、牝に見ならって土の上に腹ばいになり、鼻をあげてひくひくと匂いを嗅いだ。

風は死んでいるようであったが、微かに流れていて、陽炎のようにキャンプからもえ上る新鮮な肉の匂いを、運んできた。

牝ライオンたちは二日ほど何にも喰っていないかったのだ、空腹でグウグウと腸が音をたて、胃の腑は黄水ででき

きりと痛んだ。

しかし牝ライオンは辛抱よく待ち続けた。

夜が深くなつて、星の輝きがました。キャンプからは星間の疲れを告げる軀の音以外になにも聞こえなくなった。

牝は、そこでのっそりと身体を起こした。牝二頭も続いた。

途中にケーブルが半捲きにされたウインチが置かれてあった。見たこともない奇妙な道具に、牝ライオンはぎよつとして背毛をたてたが、牝はなれきった態度で、しかも極めて慎重に足音を忍ばせて一番手前のキャンプに近よっていった。

キャンプからは、ますます強く肉の香が漂っていたが、牝ライオンたちにはキャンプそのものが不安で、近よってゆく牝ライオンの背後七、八メートルのところ立ちどまり、夫の行動を見守っていた。

火も恐ろしいものの一つだったが、薪をくべ忘れたために、それは既に消えかかっていた。暗闇に困難を感じない牝ライオンたちには、キャンプの入口に近づいた夫の尾の先が歓喜の緊張で蛇のようにうねうねと動いているのが見えた。そこはウンガンシークのキャンプだった。

Shetani (悪霊)

ワ・タイカ族には一つの迷信があった。彼らの聖なる祈禱師が、タイタ高原に育つ神の木を燃してつくったという黒い粉をひたいに塗っておくと、獣の害を免かれるというのだった。その神の木がどんな植物であるかは、ウンガンシークも知らなかった。しかし、彼は牛の角でつくった薬いれにその粉を入れていて夜になるとちよっぴり出して、自分のひたいに塗った。

その迷信からだけではなく、自分は誰よりも強いのだという自信と、部下を信頼させるにはまず上に立つ者が擁護者にならねばならないという信念とから、彼はいつもテントの入口に眠った。

この夜も六人の人夫たちを奥に寝かせ、彼は外に頭を向けて大きな薪をかいていた。

六人の土工のうちの二人が、

「コロ！（放せっ！）」

と叫ぶウンガンシークの叫び声で眼がさめた。びっくり

して見ると、ウンガンシークの大きな体が、もの凄いい力で表の方にひきずられてゆくとところだった。ウンガンシークがふりまわす腕が触って、テントが大きく揺れた。

眼ざめたばかりのぼんやりとした頭には、ウンガンシークが何か冗談をやらかしているのだと思えたが、次の瞬間、大きな猫の咽喉の奥から発するゴロゴロというぶきみな含み声を聞いて、すべてがはつきりした。二人は金切り声をあげて、毛布にくるまっている仲間を叩きまわった。

その間にもウンガンシークと人喰いとの格闘は続いていた。ウンガンシークは左半身を上にして眠っていたので、いきなり左肩をくわえられた。彼は曳きずられながら自由になる右手でライオンの頭を殴り、押し放そうとした。ふかぶかとした鬚が手にさわった。彼はその毛を掴んだ。ウンガンシークは素手でしばらくの間、ライオンと闘った。

闘いながら彼は短刀のことを思い出した。急いで腰に手をやった。起きているときはいつも腰につけている短刀も、就寝中だったので枕もとに置いたままになっていた。武器がないとわかると気丈な彼は、ライオンの眼玉をつぶそうとして指で眼をさぐった。人喰いは彼の指が眼にふれたとたん獲物をほうり投げた。